

日、英、豪の国家安全保障戦略 に関する比較研究（下）

借行社安全保障研究員

二宅 浩介 陸自94

7 日英豪のNSSの比較 ○全体像の比較

これまでに見たように、日英豪はそれぞれの事情からNSSを策定しているが、その有り様もそれぞれである。基本方針、国益、国家安全保障目標、戦略環境、戦略的アプローチなどの各要素の概要について、日英豪の各NSSを比較した表が、別紙第3「日英豪の国家安全保障戦略における記述内容の比較（その1）」（前号掲載）、別紙第4「日英豪の国家安全保障戦略における記述内容の比較（その2）」である。

○日英豪の国家安全保障戦略における記述の比較

・構成（目次体系）

日英豪のNSSにおける構成（目次体系）についての共通点は、いずれも、基本方針（理念・ビジョン等）、自国への認識、国家安全保障目標、戦略環境（脅威認識等）、国家安全保障目標および戦略環境に対応したアプローチについて記述されていることである。半面、その詳細を見ると相違点もあ

る。例えば、国益についての直接的な記述は、英豪には見られない半面、日本では明記されている。他方で、英豪では今後五年間の優先事項について明記されているが、日本の場合、日NSSの分量自体がそれほど多くはなく既

に絞り込まれているためか、優先事項についての記述はない。また、日本の場合、戦略環境、戦略的アプローチについては、それぞれ一つにまとまった形で記述されている半面、豪州の場合、基本的フレームワークおよび数年先の展望といった二部構成で記述されている。また、英NSS・SDSR2015の場合、戦略環境については、一つにまとまった形で記述されている半面、戦略的アプローチについては、国家安全保障目標各々への対応がかなり明確な構成になっている。

日英豪ともに、分量的には戦略環境および戦略的アプローチに関する記述が圧倒的に多い。戦略環境についての記述の分量としては、英国は全体の9・5%、豪州は33・2%、日本は22・2%となっており、豪州が多く、

英国がやや少ない。戦略的アプローチについての記述の分量としては、英国は全体の80・3%、豪州は44・5%、日本は64・7%となっており、英国がかなり多い。なお、分量の割合算出においては、英豪については語数でカウント、日本については文字数でカウントした（以下、同様）。

・基本方針（理念・ビジョン等）

共通点は、程度の差はあるにせよ、世界に参与していこうとする積極的な姿勢である。

半面、特徴的なことは、英国がソフトパワーを前面に押し出し、英国の影響力投影をより強く意識している点、経済との関連性を相当強く意識している点、核使用をも含めたあらゆる手段を取りうるという強い姿勢である点である。そこには、かつての大英帝国という歴史的背景と安保理常任理事国であることから来るであろう強い自負と壮大な国家戦略、そして幾たびもの戦争から国家・国民を守り抜いてきた経験と教訓に裏付けられた現実主義的な国家戦略が感じられる。

豪州は、統一国家安全保障システムの保有、アジアの世紀における地域への関与などを掲げている。

日本は、憲法をはじめ様々な制約や先の大戦等の歴史的背景がある中でも、地球儀を俯瞰するような積極的平

和主義を理念として、経済大国としての責任ある行動をとろうとする、これまで以上の強い姿勢と広い視野が感じられる。

・国益および国家安全保障目標

共通点は、日英豪ともに、国家安全保障目標については明確に設定している点である。相違点は、英豪が国益についての直接的な記述がほとんどないのに対して、日本は明記していることである。しかし、内容的に見れば、日本が国益で記述しているような要素を、英豪は国家安全保障目標など別の形で記述しており、基本的にはほぼ同様であるといえる。

・戦略環境（脅威認識等）

共通点は、日英豪いずれの国も、世界における国家・非国家主体による脅威、経済を含めた世界的な不確実性について、かなり詳細に記述していることである。相違点は、中国に対する認識などである。中国に対し、日本は脅威として捉えているのに対し、英豪は存在感を感じつつも必ずしも脅威としては捉えていない。

なお、戦略環境についての各具体的項目についての記述量については、日英豪各国の戦略環境内の重要度合いを推し量るために、戦略環境の記述の中でどの割合で比較する。

日英豪いずれもテロやグローバル経済に関する記述は比較的多くなっている。テロについての記述の分量としては、戦略環境内での割合でみると、英国15・7%、豪州7・3%、日本7・7%となっており、英国が多い。同様にグローバル経済についての記述は、英国3・6%、豪州13・8%、日本8・1%となっており、豪州が多い。

次に、三国間について述べる。まず、中国についての記述は、英国1・6%、豪州7・1%、日本9・6%となっており、日本が多く、英国が少ない。また先述したように、対中認識も異なっている。

サイバー攻撃についての記述は、英国6・8%、豪州1・0%、日本5・2%、ロシアについての記述は、英国9・8%、豪州0・5%、日本においては明記されてなく、いずれも英国が多い。

感染症、エネルギー、移民、組織犯罪、自然災害等については、日豪ではあまり記述がない一方で、英国では一定の記述がある。また、大量破壊兵器、北朝鮮については、英豪ではあまり記述がない一方で、日本では詳細に記述されている。

全体的に特徴的なことは、英国は、テロ、ロシア、サイバー攻撃に関する記述、豪州は、グローバル経済、テロ、

アフガニスタン、東ティモール、インドネシアに関する記述、日本は、中国、北朝鮮に関する記述が多い点である。

・戦略的アプローチ

共通点は、日英豪はいずれも米国の同盟を非常に重視していること、そして対テロ、対サイバー戦、国際平和協力、国民や地方との連携、民間部門等との連携を重視していることである。

相違点は、日本が日米同盟軸であるのに対して、英国はNATO（北大西洋条約機構）、豪州はANZUS（太平洋安全保障条約）という地域同盟をも結んでいることである。しかし、英豪も、米国の安全保障上、最重要国であることには変わりがない。また、このような集団防衛が成立する要件は、①構成メンバーが特定の脅威と共通利益を共有、②共通利益の実現のための政策・行動を条約の形で予め明示的に規定、③平時の軍事的調整による同盟の制度化、とされるが、日英豪いずれも、この点を踏まえている。

また、日本も多少触れてはいるものの、英豪は強靱性の重要性について繰り返し強調している。そこには、未然防止が最善であるということも当然ではあるものの、必ずしもすべての脅威を未然に防ぎきれないわけではないだろうという現実的な認識が作用している

ものと考えられる。

なお、既に述べたように、戦略的アプローチについての各具体的項目についての記述量については、日米豪各国の戦略的アプローチ内での重要度合いを推し量るために、戦略的アプローチの記述の中で割合で比較する。

まず日英豪各国ともに比較的記述があるものから見ていく。防衛力・防衛体制構築についての記述は、英国10・3%、豪州5・4%、日本3・4%、テロ対策についての記述は、英国6・1%、豪州4・0%、日本2・5%となっており、英国が多い。

対サイバー戦についての記述は、英国3・2%、豪州9・2%、日本4・3%、組織犯罪への対応についての記述は、英国2・3%、豪州4・9%、日本0・7%となっており、豪州が多い。また国際平和協力についての記述は、英国1・6%、豪州10・0%、日本2・7%となっており、豪州が極めて多い。

対米同盟強化についての記述は、英国1・8%、豪州5・1%、日本11・3%となっており、日本が非常に多い。中国への対応についての記述は、英国0・7%、豪州1・3%、日本2・8%となっており、英国は少なく日本が多い。他方で、本土防衛・領域保全についての記述は、英国5・0%、豪州6・2%、日本1・7%となっており、

り、日本が少ない。

次に各国に相違がより多くみられる項目について述べる。核抑止、米国外の同盟国については、日豪ではあまり記述がない一方で、英国では一定の記述がある。また、経済活動との関連事項についても、英国は詳細に記述している。

また、アフガニスタンへの対応については、日本では記述がない一方で、英豪では一定の記述がある。ロシアへの対応については、日英では一定の記述があるが、豪州では記述がない。他方で北朝鮮関連については、日豪では一定の記述があるが、英国では記述がない。

全体的な特徴は、英国における防衛力・防衛体制構築についての記述の多さ、豪州における国際平和協力、対サイバー戦についての記述の多さ、そして、日本における対米同盟強化についての記述の多さである。

8 日英豪のNSSに関する比較研究結果

○共通の方向性

以上、本研究を通じて、日英豪三国の戦略文書NSSを取り上げ、比較検討してきた。もとより、本研究は、この三つのNSSの是非や優劣を問うものではなく、これらと比較することによって共通点や相違点を抽出することによ

り、日本の今後のNSSに寄与することを意図している。

既に述べたように、日英豪は、自由民主主義、法の支配等といった基本的価値観、資本主義経済、米国の同盟、海洋国家、非超大国であるという重要な共通点があるとともに、経済力に恵まれる一方で、防衛力は抑制的であり、一国ですべての脅威に対処するのではなく、大国米国との同盟を安全保障の前提としている。このことは、日英豪それぞれのNSSに反映されている。

日英豪のNSSにおける共通の方向性としては、①全般として、考察事項・記載事項の標準化・フォーマット化、②基本方針として、世界に対する積極的関与、③国家安全保障目標として、国民の安全確保、脅威の少ない安全保障環境など、④戦略環境として、テロ・サイバー攻撃等、非対称性、非国家主体のリスクの高まり、グローバル経済、民生分野、人間の安全保障関連分野の影響の大きさ、⑤戦略的アプローチとして、防衛力・防衛体制構築、対テロ・対サイバー戦、国際協調（敵を作らない・仮想敵をも取り込む外交など）、米国の同盟など国際的関与、国際平和協力など国際安全保障環境の改善、省庁・官民横断的な国家総力的な取組、国民や地方との連携、そして日本の場合には記述が少なかったが強靱性の重視、などである。

○各NSSの特徴

各NSSにおける特徴として、まず様式としては、

- ①英国の場合は、防衛力整備やNSSC機構図など、イメージ図を活用し、ビジュアル的に優れている、
 - ②豪州の場合は、冒頭より全体像が表形式で簡潔に示されており一目瞭然である、
 - ③日本の場合は、分量はやや少ないながらも、策定の趣旨、基本方針（理念等）、国益、国家安全保障目標、戦略環境、戦略的アプローチなどといったNSSの基本的要素が確実かつ丁寧に記述されており、最も基本的、模範的なNSSである、と言える。
- このように、日英豪のNSSは、三者三様の特色と優れた面を持っている。内容としては、
- ①英国の場合は、かつての大英帝国としての歴史的経緯や英連邦や海外領土の存在から来るであろう、地球規模での広範な視野と壮大な構想、そして安理常任理事国としての矜持、ソフトパワーのみならず比較的大きな防衛予算および核兵器の保有、
 - ②広大かつ資源大国ではあるが人口や兵力が少ない豪州の場合は、ミドルパワーとしての国家戦略、グローバル経済やテロ・紛争への極めて高い関心、そして、国際的関与および豪米同盟・

アジア太平洋の重視ならびに豪州領土での米軍等の展開地域・訓練地域の提供、

- ③日本の場合は、経済大国であるが、憲法上の制約と専守防衛、非核三原則等といった基本方針がある中で、日本として可能な範囲での、経済外交やODAの活用などを含めた非軍事的貢献を中心とした、地球儀を俯瞰するような広い視野での積極的平和主義、などがそれぞれの特徴である。

○筆者の結論

以上から本研究の結論は、「日本、英国、豪州の国家戦略は、いずれもオープンで緊密かつ不確実な世界の中で、サイバー戦・国際テロ等の非対称戦や市民生活へのリスクなどを重視しており、それは外務省、防衛省など各省庁だけで対応しうるものではなく、

これまで以上により一層、国家全体での取組が必要になってきている。それは2013年に創設されたNSSCとそれに続く国家安全保障局の存在意義および重要性や、サイバー戦への対処とインテリジェンスの強化、そして国民や民間企業等との連携の重要性を改めて強調する」である。

○相互協力分野

日英豪が協力・補完できる部分としては、①アジア太平洋地域において、

価値観を共有するパートナーとして協力を継続し、共有されている国益や国際法に基づいた国際秩序を守り、また、

- ①今回初めてNSSを策定した以上、この戦略を願望や理想の羅列ではなく実現可能なものとすべく、NSSの実行機関ともいうべき各省庁、各施策による具体化（予算化を含む）・実現・フォローが必要、②NSSの基礎ともいうべき日本の国力の増進およびバランス（経済・財政、民生等との兼ね合い）、③所要の組織の新設・改編（対外情報機関等）、④実戦経験のある国と連携しつつ日本独自の戦略研究、

○日本の今後の課題

①今回初めてNSSを策定した以上、この戦略を願望や理想の羅列ではなく実現可能なものとすべく、NSSの実行機関ともいうべき各省庁、各施策による具体化（予算化を含む）・実現・フォローが必要、②NSSの基礎ともいうべき日本の国力の増進およびバランス（経済・財政、民生等との兼ね合い）、③所要の組織の新設・改編（対外情報機関等）、④実戦経験のある国と連携しつつ日本独自の戦略研究、

人材教育・登用・育成、実践的・総合的演習、などを考慮すべきである。

そしてまた、今回のNSSは英豪に比べて比較的簡潔な分量であったが、もし増量するという可能性があるのであれば、事態の未然防止が最善であることは言うまでもないが、不確実性の高い今日、英豪のように、不測事態が発生してしまった場合を想定した強靱性強化、そして災害やパンデミックなどへの対応にまで、記述を広げることにも検討する価値があるだろう。その際には、焦点が不鮮明とならないよう、選択と集中を念頭に、英豪のように優先事項を明記することが必要となるであろう。

結 言

以上、日英豪のNSSを比較研究することで、一定の方向性、結論、今後の課題を得ることができた。

また、日英豪の各NSSは、基本を抑えつつも、それぞれ特色と優れた面を備えている。特に、日本初のNSSは、今後検討すべき課題はあるにせよ、地球儀を俯瞰するような積極的平和主義という日本の方向性を示すとともに、基本的要素を確実に押さえ、簡潔によくまとめられており、NSSとして一つの模範例を示した。

日英豪の国家安全保障戦略における記述内容の比較（その2）

【別紙第4】

	英 国	豪 州	日 本
戦略環境 (脅威認識等)	<p>①安全保障上の挑戦 (テロと過激主義、不安定性、移住、重大組織犯罪、地球規模の健康安全保障)</p> <p>②国家ベースの脅威の復活</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ロシアの動向 ●より広範な国家の競争 (中東、北アフリカ、南・東南アジア、北朝鮮等) <p>③テクノロジーの役割 (サイバー、技術開発)</p> <p>④ルールに基づく国際秩序</p> <p>⑤リスク (市民の非常事態、海外の大規模自然災害、エネルギー安全保障、世界経済、気候変動と資源不足)</p>	<p>【国家安全保障のリスク】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①スパイ活動と外国の干渉 ②脆弱な国家の不安定性 ③敵対的サイバー活動 ④大量破壊兵器の拡散 ⑤重大組織犯罪 ⑥国家の紛争または弾圧 ⑦テロと暴力的な過激主義 <p>【国家安全保障概観】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①経済的不確実性と世界的再編 ②非国家主体の重要性 ③危険地域での低強度紛争 ④より幅広い世界的課題 (資源欠乏、気候変動、人口増大、オンライン化、汚職) 	<p>①グローバル</p> <ul style="list-style-type: none"> ●パワーバランスの変化 ●技術革新の急速な進展 ●大量破壊兵器等拡散の脅威 ●国際テロの脅威 ●国際公共財に関するリスク ●人間の安全保障の課題 ●グローバル経済のリスク <p>②アジア太平洋地域</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地域の戦略環境の特性 <ul style="list-style-type: none"> ○北東に軍事大国等が集中 ○核兵器保有国等の存在 ○安保地域枠組は不十分 ○各国の体制の相違は大 ●北朝鮮の軍事力増強と挑発 ●中国の急速な台頭と様々な領域への積極的進出
優先事項	<ol style="list-style-type: none"> ①テロ・過激主義への対処 ②対サイバー戦 ③国家的脅威阻止、強靱性 ④国際秩序・制度、紛争減少 ⑤英国の繁栄を促進 	<ol style="list-style-type: none"> ①アジア太平洋地域への関与強化 ②サイバー政策・作戦の統合 ③効果的なパートナーシップの構築 	明記なし
戦略的アプローチ (手段)	<ol style="list-style-type: none"> ①国民保護へのアプローチ <ul style="list-style-type: none"> ●英国・海外領土・海外在留英国人の保護 ●防衛政策 ●核抑止力 ●過激主義とテロを防止 ●サイバー戦 ●組織犯罪への対応 ●危機対処と強靱性強化 ②英国の世界的影響力投影へのアプローチ <ul style="list-style-type: none"> ●同盟国・パートナーとの連携、グローバルな関与 ●国際秩序と制度の強化 ●紛争取組と安定性構築 ③繁栄促進へのアプローチ <ul style="list-style-type: none"> ●経済安全保障と経済的機会の追求 ●イノベーション ●防衛等関連産業の強化 ④戦略の実施と改革 	<p>【国家安全保障の8本柱】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①テロ・スパイ活動・外国の干渉への対処 ②豪州とその国益への攻撃の抑止・排除 ③国境の保全 ④重大組織犯罪の防止・探知・根絶 ⑤国益に資するような国際安全保障環境の促進 ⑥国民・財産・インフラ・機構の強靱性強化 ⑦豪米同盟の強化 ⑧世界、特にアジア太平洋地域における理解促進と影響力の確保 	<ol style="list-style-type: none"> ①能力・役割の強化・拡大 ②日米同盟の強化 ③パートナーとの外交・安全保障環境強化 ④国際社会の平和と安定への国際的努力に積極的寄与 ⑤地球規模課題解決のための協力強化 ⑥国内基盤強化・内外の理解促進 <p>※防衛力のあり方は防衛計画の大綱に</p>